

家族関係の再構築における居住形態の意義について — 家族イメージ法と肯定的家族観尺度を用いて —[※]

徳田 仁子・柴田 美文

要 約

本研究は、青年が持つ家族イメージが居住形態によってどのように異なるのかを家族イメージ法及び肯定的家族観尺度を用いて検討したものである。被験者は26人の同居学生と28人の別居学生である。家族イメージ法における家族成員間距離、及び家族成員の向きあい方を測定して、肯定的家族観尺度との相関を調べた。家族成員の向きについては新たに考案した視線交錯度を測定して検討した。その結果、別居学生は同居学生よりも家族イメージがより肯定的で、家族成員間距離が近く、かつ向き合っている場合が多かった。青年期にある学生にとって、家族との距離は家族を心理的に結びつけ、家族関係を再構築する意義があることが認められた。

キーワード：家族関係、居住形態、家族イメージ法、肯定的家族観尺度

I. 問題と目的

1. 青年期の家族の課題

子どもと家族との関係は、子どもの親への依存が減少して、心理的に自立するという子どもの成長にともなって変化する。一般に、青年期とは、子どもが家族から離れて外の社会へ世界を広げ、自分の生活基盤を確立しながら別の家族を作り上げるまでの移行段階にあるとらえられている。

他方、家族療法の立場から、家族を一つの「家族システム」と考え、個々人の発達段階と同じような家族の発達段階を「ファミリー・ライフサイクル」として、その周期やパターンおよびその発達段階モデルが提唱されている。岡堂（1986）がカーターとマクゴルドリック（Carter, E.A., and McGoldrick, M. 1980）のモデルを、また鑑（1990）がロジャーズ

[※] 本論は、平成16年度札幌学院大学人文学部臨床心理学科卒業論文として柴田美文（現在社会福祉法人侑愛会勤務）が提出した論文に、指導教員である徳田仁子が加筆修正したものである。本論の構成および文責は徳田にある。

(Rodgers, S, L. 1977) のモデルを紹介しているが、ここではカーターとマクゴルドリックのものに参考してみたい。

カーターとマクゴルドリックは「ファミリー・ライフサイクル」を婚約・結婚から配偶者の一方の死までとする伝統的な社会学説から検討をはじめ、独身時代から結婚を経て老年期に至るまでの現代家族のファミリー・プロセスを6段階に区分できるとしている。このモデルの特徴は、現代家族が抱えている結婚・離婚・再婚などの多様な過程をできるだけ実状に即して組み込み定式化しようとしていることにある。彼らの提唱しているファミリー・ライフサイクルは Table 1 のようにまとめられる。

Table 1 ファミリー・ライフサイクル (Carter, E.A. and McGoldrick, M. 1980 岡堂1986による)

	要 点	心理的な移行過程	発達に必須の家族システムの第2種変化
第Ⅰ段階	親元を離れて独立して生活しているが、まだ結婚していない若い成人	親子の分離を受容すること	a. 自己を出生家族から文化させること b. 親密な仲間関係の発達 c. 職業面での自己の確立
第Ⅱ段階	結婚による両家族のジョイニング(新婚の夫婦)	新しいシステムへのコミットメント	a. 夫婦システムの形成 b. 拡大家族と友人との関係を再編成すること
第Ⅲ段階	幼児をもつ家族	家族システムへの新しいメンバーの受容	a. 子どもを含めるように、夫婦システムを調整すること b. 親役割の取得 c. 父母の役割。祖父母の役割を含めて拡大家族との関係の再編成
第Ⅳ段階	青年期の子どもを持つ家族	子どもの独立を含めて家族の境界を柔軟にすること	a. 青年が家族システムを出入りできるように親子関係を変えること b. 中年の夫婦関係。職業上の達成に再び焦点を合わせる
第Ⅴ段階	子どもの出立と移行が起こる家族	家族システムからの出入りが増大するのを受容すること	a. 二者関係としての夫婦関係の再調整 b. 親子関係を成人同士の関係に発達させること c. 配偶者の親・兄弟や孫を含めての関係の再構成
第Ⅵ段階	老年期の家族	世代的な役割の変化を受容すること	a. 自分及び夫婦の機能を維持し生理的な老化に直面し、新しい家族的、社会的な役割を選択すること b. 中年世代がいつそう中心的な役割を取れるよう支援すること c. 経験者としての知恵をもって他の世代を支援するが、過剰介入はしないこと d. 配偶者や兄弟、友人の死に直面し、自分の死の準備をすること、ライフ・レビューによる人生の統合

青年期の子どもを持つ家族の課題（Ⅳ段階）としては、「青年が家族と家族の外の社会とを自由に入出りできるように、家族の成員間の境界を拡大化柔軟化していくこと」と述べられている。青年が家族から離れた社会とを自由に行き来できるようになるためには、家族との間に適切な距離を維持しなければならない。村瀬（2004）の面接法及び質問紙による調査によれば、子どもの加齢に伴って親との距離は増大するが、大学生になると、再び親との会話が増えるなど親子関係は質的に変化することが窺える。青年と家族は、互いに一定距離を取りながらも、親は子どもの自立を支え、子どもは親を支える時期へと向かうというように、互いに支えあい、見守ることで、互いに関心を保ち続けている。青年がいる家族は、距離ができたことで、互いに関心が薄れたのではなく、心理的距離をとりながらも、お互いの絆を保持し、家族成員への関心を向け合い続けているのではなかろうか。すなわち、青年の自立への課題の一つは家族との適切な距離化と家族との柔軟な関わり方にあると考えられる。

青年の家族からの自立を検討するにあたって、本研究では、特に青年の居住形態に着目した。家族との別居という状況は、青年と家族との境界をより強化するものと考えられる。大学生として一人暮らしをしている別居学生は、家族との物理的距離ができる同居学生とは異なる経験をしているのだが、その経験が家族からの心理的自立にどのような影響を及ぼしているかは大変興味深い。

2. 家族イメージ法

家族イメージ法は、秋丸・亀口（1988）が、家族システム理論を背景として、家族構造を把握する一助として開発した、家族の成員同士の関係を図式化して表現する投影法である。彼らは、ケベック家族造形法（Family Sculpture Technique）にヒントを得て、個々の家族成員が自分の家族をどのように捉えているかを視覚的イメージとして表現する方法を改良している。その特徴は、①家族成員同士の「心理的距離」、②心理的な「向き」、③各家族成員の「結びつき」の強さを測ることができることである。

被験者は、B4版のFIT用紙の一辺15cmの正方形の枠内に、家族成員に見立てた円形のシールを配置する。円形シールは、直径1.6cmで白から黒の5段階に色分けされているが、この色は各家族成員のパワーの強度の違いを表し、円形シール内の▲（鼻）の印が、各家族成員の向きを表す。さらに各成員（シール）の間を3段階の線で結び、各家族成員間の結びつきの強さを表す。

これまで、家族イメージ法を用いた研究には、小学生の家族イメージ法に関する研究（新藤・相模・田中，2002）、中学生の抱く家族イメージ（中野・亀口，1992，大下・亀口，1999）などがあり、心理的問題を抱える人のアセスメントだけではなく、家族内での問題発生を予防し、早期に対処する際の簡便で有効な道具であると考えられている。

3. 心理的な向き合い方を計量するための「視線交錯度」について

(1) 家族関係における心理的向き合い方

青年期の家族においては、青年と家族との心理的距離のほか、家族成員（特に青年と親との）心理的な「向きあい方」がとても重要であると考えられる。家族イメージ法の特徴が、①家族成員間の心理的距離 ②心理的向き ③結びつきの強さ にあることはすでに述べたが、今回青年期の家族イメージを検討するにあたって、われわれは「向き」を計量するための「視線交錯度」を考案した。以下にこの新たな方法を考案した経緯について詳述してみたい。

新藤ら（2002）は、小学生の「家族イメージ法」に関する研究の中で、家族イメージ法で表された「向き」について以下のように述べている。「対象者の大半が家族成員の関心の方向を「内向き」にイメージしている。このことから、家族がお互いに関心を向け合って生活していることがわかる。小学生の時期は、一般的に両親の保護と子ども自身の心理的な依存が強固な時期である。自立に向かう準備をしながらも、基本的には、親に強く依存しているのである。」すなわち、小学生の親への心理的依存は、家族成員と強固に「向き合う」という形で表現されている。

他方、親から自立し始めた青年においては、この家族成員の関心を示す「向き」の関係はどのように表されるのであろうか。具体的なイメージとしては、家族成員の関心を示す「向き」（心理的向き）が、「向き合っている」のか、「向き合わない」のかが家族成員の関わりのあり方を反映すると仮定される。

家族イメージ法における先行研究においては、「向き」については、家族成員がお互い同士向きあっている場合を「内向き」、向きあっていない場合を「外向き」（柴崎ら、2001）と分類したものや、向きを4つの型（①向き合い②平行③直角④相反）に分類する（亀口、2005）などがある。しかし、向きを直接計量して測定する研究は見あたらなかった。そこで、本研究では、家族の「向き」を表す「視線交錯度（向き合い度）」を考案し検討した。

(2) 視線交錯度

家族イメージ法によって得られた家族成員同士を表すシールの中心とシール内の印（鼻）の向きの延長線を引き、二者間において、その線が交わった角度を「視線交錯度」として、数量化した。

視線交錯度0度は、「全く別の方向を向く（相反）」から「同一方向を向く（平行）」範囲を示し、二者間の直線が交わらない状態を表している。視線交錯度180度は、互いに向き合っている直線を示す。視線交錯度は、0度から180度の範囲内で測定され、角度が大きくなるほど、二者間は互いに「向き合っている」ことを示している。（Fig. 1 参照）

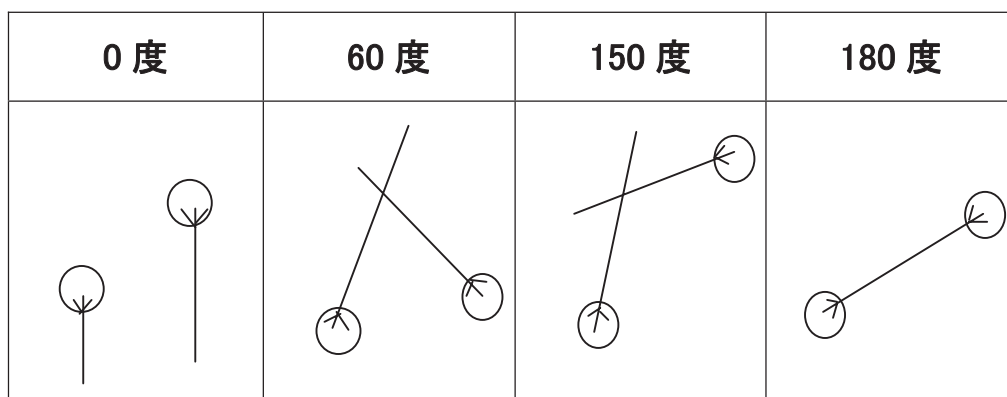


Fig. 1 視線交錯度の例

4. 本研究の目的と仮説

親との心理的「距離」と「向き」を見ることができる「家族イメージ法」を用いることにし、青年の居住形態の違いが家族との関係にどのような影響を与えているかについて検討したい。

これまでの研究において、秋丸・亀口（1988）、中野・亀口（1992）、大下・亀口（1999）、田中・白（2003）、前出・島谷（2004）など、家族イメージ法における家族成員間の距離についての研究はあるものの、向きを中心に取り上げた研究は見当たらない。また、大学生の住居状況の差異について検討したものはない。

そこで、本研究の目的と仮説を以下のように設定する。

目的 1；家族と同居している学生，別居している学生において，家族との物理的な距離の差異が，親との心理的な距離・向きに影響があるのか，家族イメージ法を用いて検討する。

仮説 1；同居学生と別居学生では，家族イメージ法に現れる「心理的距離」「心理的向き」が異なるのではないだろうか。

目的 2；家族と同居している学生，別居している学生では，家族に対する見方（肯定的に家族をみているのか）に違いがあるのか，肯定的家族観尺度（茂木，1996）を用いて検討する。

仮説 2；家族との物理的距離がある別居学生の方が，家族との一定の距離ができ，家族を肯定的にみているのではなかろうか。

目的 3；家族イメージ法と肯定的家族観尺度の比較，関連を検討する。

仮説 3；家族を肯定的に見ている別居学生は，「心理的向き」がより向かい合うのではないだろうか。

Ⅱ. 方 法

1. 対 象 S市近郊の大学生，男女54名（男性25名，女性29名，平均年齢21.01歳）を対象とした。別居学生（28名）については，一人暮らしをして3年目～4年目の学生を対象とし，調査は，2004年9月下旬～10月中旬に，個別に実施した。
2. 調査内容 調査は，1）家族に関する質問紙，2）家族イメージ法で構成され，実施時間は，約30分程度であった。
 - 1）家族に関する質問紙 茂木（1996）が現在の家族システム特性について作成した42項目（肯定的家族観尺度〈30項目〉，役割・決まり尺度〈6項目〉，問題解決尺度〈6項目〉）を実施したが，本論で分析対象としたのは，そのうち，「肯定的家族観尺度」30項目の合計である。得点が高いほど，家族関係を肯定的に認識していることを示す。なお他に親とのかかわりの違いについての簡単な質問紙を実施した。
 - 2）家族イメージ法 柴崎ら（2001）の方法を原案として，5色（赤・青・黄・白・緑）のシールから，家族成員のイメージに合うシールを選び，15cmの正方形の枠内に自由に配置してもらった。NO.1「三者関係図（父・母・自分）」とNO.2「自分が想像する家族図」（兄弟・祖父母などを含む）の2枚の作成が求められたが，今回の分析には，NO.1の三者関係図を用いた。家族イメージ法の終了時点で，家族成員の向きについて確認をした。また，別居学生に「家族と一緒に住んでいたときと，離れて暮らしてからとの家族に対する見方や，親との変化を教えてください。」と質問し，その内容を録音した。

Ⅲ. 結 果

分析は，父母・父子・母子間における「心理的距離」と「視線交錯度」を測定した。「心理的距離」については，それぞれのシールの中心間の距離を求めた。「視線交錯度」については，I-3で紹介した測定方法に基づき測定した。

結果は，(1)肯定的家族観尺度と家族イメージ法の心理的距離について(2)肯定的家族観尺度と視線交錯度について，それぞれに性別（男・女）×居住（同居・別居）×テスト（肯定的家族観尺度・心理的距離 or 視線交錯度）の3要因分散分析を実施した。

1. 肯定的家族観尺度と心理的距離について

肯定的家族観尺度の合計と，家族イメージ法の心理的距離による①父母距離②父子距離③母子距離，それぞれの平均と標準偏差の結果を示したものがTable 2である。

Table 2 肯定的家族観尺度得点と心理的距離

性 別 居 住	男 子 (N=25)		女 子 (N=29)	
	同居 (N=12)	別居 (N=13)	同居 (N=14)	別居 (N=15)
肯定的家族観平均 (S.D)	62.83 (19.80)	79.00 (9.54)	75.00 (6.67)	82.07 (12.91)
①父母距離平均 (S.D)	6.52 (1.65)	5.12 (2.13)	4.99 (2.37)	3.72 (1.51)
②父子距離平均 (S.D)	6.63 (1.47)	4.89 (1.57)	5.81 (2.89)	5.07 (2.12)
③母子距離平均 (S.D)	5.72 (2.15)	4.95 (1.59)	4.62 (1.50)	4.87 (2.14)

① 父母距離について

性別(2)×居住(2)×テスト(2)の3要因の分散分析の結果、「要因B：同居と別居」と「要因C：肯定的家族観と父母距離」の主効果が有意であった。(F_(1, 50)=7.66, p<.01) (F_(1, 50)=1415.6, p<.01) また、「要因B：同居と別居」と「要因C：肯定的家族観と父母距離」, 「要因A：男子と女子」と「要因C：肯定的家族観と父母距離」の交互作用が有意であった。(F_(1, 50)=12.24, p<.01) (F_(1, 50)=6.02, p<.05) そこで、特に、居住別においてのみ肯定感と距離の水準別誤差項を用いて、単純主効果検定をした結果、肯定的家族観において、別居の方が同居よりも得点が有意に高いことが分かった。(F_(1, 50)=10.04, p<.01) また、父母距離において、別居の方が同居よりも有意に距離は近かった。(F_(1, 50)=5.83, p<.05, Fig. 2) つまり、より肯定的家族観が高い別居学生は、父母距離が近いといえる。

② 父子距離について

性別(2)×居住(2)×テスト(2)の3要因の分散分析の結果、「要因B：同居と別居」と「要因C：肯定的家族観と父子距離」の主効果が有意であった。(F_(1, 50)=7.70, p<.01) (F_(1, 50)=1400, p<.01) また、「要因B：同居と別居」と「要因C：肯定的家族観と父子距離」, 「要因A：男子と女子」と「要因C：肯定的家族観と父子距離」の交互作用が有意であった。(F_(1, 50)=2.12, p<.01) (F_(1, 50)=4.62, p<.05) そこで、特に居住別においてのみ、肯定感と距離の水準別誤差項を用いて、単純主効果を検定した結果、肯定的家族観において、別居の方が同居よりも得点が有意に高いことが分かった。(F_(1, 50)=10.04, p<.01) さらに、父子距離において、別居の方が同居よりも有意に距離は近かった。(F_(1, 50)=4.27, p<.05, Fig. 3) つまり、肯定的家族観が高い別居学生は、父子距離が近いといえる。

③ 母子距離について

性別(2)×居住(2)×テスト(2)の3要因の分散分析の結果、「要因B：同居と別居」と「要因C：肯定的家族観と母子距離」の主効果が有意であった。(F_(1, 50)=8.86, p<.01) (F_(1, 50)=1570.0, p<.01) また、「要因B：同居と別居」と「要因C：肯定的家族観と母子距

離」, 「要因A：男子と女子」と「要因C：肯定的家族観と母子距離」の交互作用が有意であった。(F(1, 50)=10.94, p<.01) (F(1, 50)=5.23, p<.05)

そこで、特に居住別においてのみ、肯定感と距離の水準別誤差項を用いて、単純主効果を検定した結果、肯定的家族観において、別居の方が同居よりも得点が有意に高いことが分かった。(F(1, 50)=10.04, p<.01, Fig. 4) 母子距離において、住居別による有意差はなかった。つまり、別居学生の方が同居学生よりも、肯定的家族観の得点は高いが、家族イメージ法の心理的な母子距離に差は見られない。

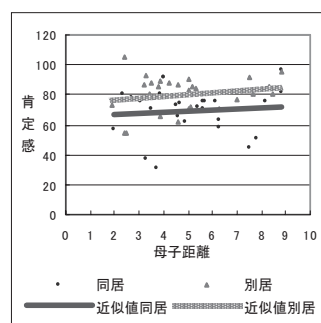
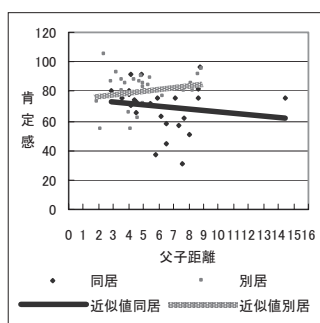
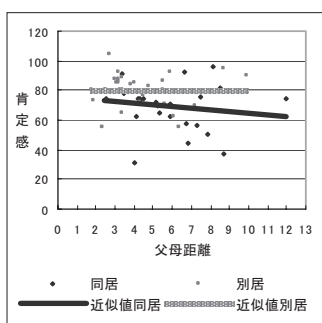


Fig. 2 肯定的家族観と父母距離 Fig. 3 肯定的家族観と父子距離 Fig. 4 肯定的家族観と母子距離

2. 肯定的家族観尺度と視線交錯度について

肯定的家族観尺度の合計と家族イメージ法による①父母の向き合い②父子の向き合い③母子の向き合いについて、視線交錯度を用いて測定し、それぞれの平均と標準偏差の結果を示したものが、Table 3である。

Table 3 肯定的家族観尺度得点と視線交錯度

性 別	男 子		女 子	
	同居 (N=12)	別居 (N=13)	同居 (N=14)	別居 (N=15)
肯定的家族観平均 (S.D)	62.83 (19.80)	79.00 (9.54)	75.00 (6.67)	82.07 (12.91)
①父母視線交錯度平均 (S.D)	35.42 (38.05)	81.15 (56.77)	63.64 (41.45)	61.93 (37.74)
②父子視線交錯度平均 (S.D)	42.83 (48.19)	86.85 (57.94)	88.14 (57.54)	103.60 (50.85)
③母子視線交錯度平均 (S.D)	40.83 (47.66)	83.00 (49.48)	105.14 (48.92)	138.47 (28.87)

① 父母視線交錯度について

性別(2)×居住(2)×テスト(2)の3要因の分散分析の結果、交互作用は見られなかったが、

「要因C：肯定的家族観と父母視線交錯度」の主効果が有意であった。 $(F_{(1, 50)}=5.47, p < .05)$ つまり、肯定的家族観が高いほど、父母の視線交錯度が大きいということがいえる。また、別居学生は、父母の視線交錯度に関係なく、肯定的家族観は同居学生よりも高い傾向にあることが分かる（Fig. 5 参照）。

② 父子視線交錯度について

性別(2)×居住(2)×テスト(2)の3要因の分散分析の結果、交互作用は見られなかったが、「要因B：同居と別居」の主効果が有意であった。 $(F_{(1, 50)}=6.05, p < .05)$ つまり、別居学生の方が、肯定的家族観が高く、父子の視線交錯度が大きいことが分かった。また、「要因A：男子と女子」の主効果が有意であった。 $(F_{(1, 50)}=5.28, p < .05)$ つまり、女子の方が、肯定的家族観が高く、父子の視線交錯度が大きいといえる（Fig. 6 参照）。

「父子の向き」は、居住別においても、性別においても、あまり差がないことが明らかになった。

③ 母子視線交錯度について

性別(2)×居住(2)×テスト(2)の3要因の分散分析の結果、「要因A：男子と女子」と「要因B：同居と別居」と「要因C：肯定的家族観と母子視線交錯度」の主効果が有意であった。 $(F_{(1, 50)}=24.50, p < .01)$ $(F_{(1, 50)}=13.10, p < .01)$ $(F_{(1, 50)}=7.60, p < .01)$ また、「要因B：同居と別居」と「要因C：肯定的家族観と母子視線交錯度」、「要因A：男子と女子」と「要因C：肯定的家族観と母子視線交錯度」の交互作用が有意であった。 $(F_{(1, 50)}=4.42, p < .05)$ $(F_{(1, 50)}=17.69, p < .01)$ そこで、居住別のみについて、肯定感と視線交錯度の水準別誤差項を用いて、単純主効果を検定した結果、肯定的家族観において、別居の方が同居よりも得点が有意に高いことが分かった。 $(F_{(1, 50)}=10.04, p < .01)$ さらに、母子の視線交錯度において、別居の方が同居よりも有意に大きかった。 $(F_{(1, 50)}=9.09, p < .01, \text{Fig. 7 参照})$ つまり、肯定的家族観がより高い別居学生は、母子の向きが向き合っているといえる。

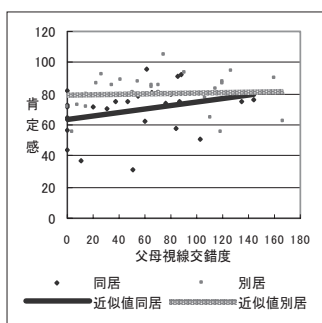


Fig. 5 肯定的家族観と父母視線交錯度

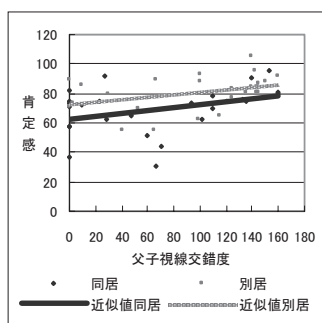


Fig. 6 肯定的家族観と父子視線交錯度

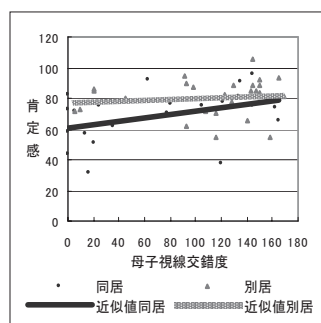


Fig. 7 肯定的家族観と母子視線交錯度

IV. 考 察

以上の結果「肯定的家族観尺度」、家族イメージ法における「心理的距離」「視線交錯度」のいずれにおいても、「同居と別居」による差が顕著であった。(Table 4 参照)

Table 4 居住別・性別の結果

肯定的家族観 ※肯定的家族観が高いほど、家族を肯定的に認知している		
	居住別	性 別
	同居<別居	男子<女子
心理的距離 ※距離が大きいほど心理的距離は離れている		
	居住別	性 別
	同居>別居	男子>女子
父母距離	同居>別居	男子>女子
父子距離	同居>別居	男子>女子
母子距離	同居>別居	男子>女子
視線交錯度(向き合い度) ※角度の大きいほど心理的向き合いは強くなる		
	居住別	性 別
	同居<別居	男子<女子
父母の向き合い	同居<別居	男子<女子
父子の向き合い	同居<別居	男子<女子
母子の向き合い	同居<別居	男子<女子

- ① 「肯定的家族観」において、別居学生は、同居学生より家族を肯定的に認知している。
- ② 「心理的距離」において、別居学生は、同居学生より、距離を近くに表す。特に、「父母距離」「父子距離」において、より肯定的家族観が高い別居学生は、距離が短い。
- ③ 「視線交錯度」において、別居学生は、同居学生より角度が大きい。特に、「母子の視線交錯度」においては、より肯定的家族観が高い別居学生は、角度が大きくなっている。

1. 肯定的家族観尺度について

肯定的家族観尺度の得点は、別居学生の方が、同居学生よりも高いという結果になった。つまり、家族との物理的距離がある別居学生の方が、家族を肯定的に認知しているということになる。

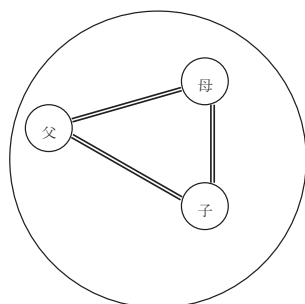
この家族を肯定的に認知することは、青年後期にあたる大学生の家族の課題にあげられた「家族との一定の距離・境界」に関わると考えられる。物理的距離ができた別居学生は、親を一人

の大人として認識し、親も自立して生活をしている子どもを対等な大人として見始める。別居学生は、家族との物理的な距離ができたことで、家族関係の再構築を行うことができる。その離れた距離は、親子関係をもう一度見直す距離として、肯定的に働いていることが窺える。

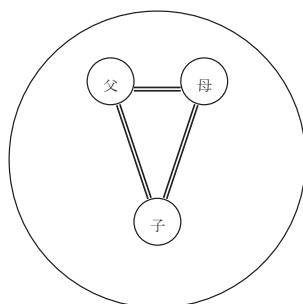
2. 心理的距離について

本研究の結果として興味深いことの一つは、家族との物理的距離が離れている別居学生が、家族との心理的な距離を近くに表しているということである。別居という状況は、家族との物理的距離を大きくするが、逆に、家族との心の距離は近くなった。これは、本研究のインタビューや質問紙における回答にも表現されている。たとえば、「家族と離れたことで、お互い連絡を取り合い、よく相談しあえるようになった。」「親の大変さが分かり、親を大切に想うようになった。」「親への感謝の気持ちが強くなった。」など、家族と離れたことによって、近くにいたときには、あまり感じるができなかった親への感謝の気持ちや大切に想う気持ちに気づき、心理的距離を近づける働きをしたのだろう。

また、別居学生の三者間（父母・父子・母子）家族図（Fig. 8）は、「父母間が近づき、母子間は適度な距離を取り、父子間と母子間は調和している」という特徴があった。これは、茂木（2002）の「家族から自立した理想の家族図」の特徴にあった「親子世代間型」に類似している。さらに、茂木は「母子間の一定の距離が「自立」の課題」と指摘している。別居学生の家族図は、同居学生に比べ、母子間が適度に離れ、父子間とのバランスが取れた形になっており、茂木が述べた「自立を想定した理想の親子世代間型」になっている。（Fig. 9）つまり、別居学生は、親と子の世代間の距離を取ることができ、家族から自立した関係に近いと考えられる。



同居学生の家族図



別居学生の家族図

Fig. 8 同居学生と別居学生の家族図式の特徴

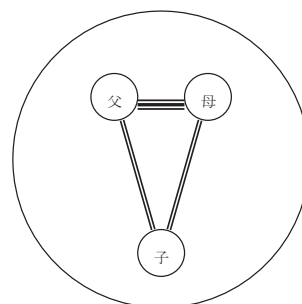


Fig. 9 理想の家族関係
（茂木, 2002による）

3. 心理的向き（視線交錯度）について

視線交錯度を用いて二者関係の向き合い度を測定した結果、三者間いずれにおいても、別居

学生の方が、同居学生よりも角度が大きく、互いが向き合っているという結果になった。また、別居学生、同居学生両者とも母子間の角度がもっとも大きく、向き合っている。前述に述べたように、子どもが家族から自立する上で、母子間の心理的距離のとり方が一つの課題と考えられていた。さらに、視線交錯度においても母子間の向き合いは、他の二者関係よりも向き合っており、母子間の視線交錯度をさらに考察することで、新たな特徴が見えると推測できる。

そこで、居住別に母子視線交錯度の平均値を比較すると、明らかに別居学生の方が、角度が大きく向き合っている。つまり、別居学生は、母子間の心理的距離をバランスよくとり、家族から自立した関係を築きながら、母と子は互いに関心を向け合う関係になっている。この「向き合い」というのは、別居学生の自立をさせる上で、重要な働きをしていると考えられる。

大学学生の親子関係について、落合（2002）は、「青年は、親との心理的・物理的距離を大きくとり、親の目の届かない世界で生活しようとする。」がその反面、「困ったときは、相談にのってほしい、遠くにあっても自分のことはわすれないうでほしい、と青年は願っている。遠くにあっても自分の成長を念じてくれる親を、青年は望んでいるのである。」と述べている。

別居学生が、同居学生に比べ、視線交錯度が大きくなっているのは、別居学生が、一人で生活することの大変を実感しながら、それと共に自分の生活を支えてくれる家族の〈きずな〉をより強く感じているからではないだろうか。

4. 居住形態が家族関係に与える影響について

齋藤（2002）は、青年期の親との新しい関係の形成について、青年期を前期と後期に区別し、以下のように述べている。青年前期（特に中学生）において青年は、「第二反抗期と呼ばれるように、親に対して、批判的になり、反抗や反発が見られることが特徴である。（中略）しかし、一方で、親への依存や甘えが強く、アンビバレントな感情を示すことになる。」他方、青年後期の青年は、「この（青年前期の）ように、一時期不調をきたす親子関係も青年後期になると緩和の方向に向かうことが多く、青年も欠点や矛盾を持った親を受容できるようになっていく。これには、より広い社会や人間関係を経たり、親元を離れて生活したりするといった経験が契機になることも多い。」

別居学生も、以前までは、家族と一緒に住むことで、親の保護下におかれていた。しかし、別居という物理的な距離をとることが、親子関係を見直す契機となる。つまり、別居学生は、親と互いに関心を向け合いながら、心の距離を縮め、家族との新たな関係を構築していると考えられる。別居という状況は、家族関係を再構築するために、大変意義深い働きをしていると考えられる。

5. 今後の課題と展望

家族イメージ法を用いた本研究の結果、青年の居住形態の違いが家族との心理的距離や家族

成員との向き合い方、肯定的な家族観に大きな影響を与えていることが示唆された。

今後、家族イメージにおける家族成員間関係の強弱の表現の問題、親以外の家族成員（兄弟・祖父母など）を含めた家族全員のイメージの分析、青年ばかりではなく親・兄弟から見たイメージ研究など、きめ細かなデータの蓄積が目指される。

一般に、子どもたちの問題、たとえば不登校やひきこもり、家庭内暴力・強迫的行動・リストカット他の症状などの問題は、家族関係のあり方の問題と感じられることが多い。実際の臨床心理面接場面では、一見不足のない家族のように見えても、「子どもも親もそれぞれに関心があり思いやりを示しているのに何かがずれている」とか、「母子密着が強いことが窺えるのに本人達の印象はお互いに理解されていないと感じている」「家族の中で肝心なことが伝わっていない」など、家族成員同士の微妙なありようが窺える。また居住形態が同居であっても普段から家族成員間の交流がほとんどなく、個室に引きこもって生活している例や、子どもの精神的な問題を家族が受け受けることを恐れて居住形態を分離することによって問題を先送りにしていると見られる例も少なくない。

子どもが一見家族から孤立しているように見えても、その心の奥底にはひとつの家族としてのまとまりを取り戻したいという希求が潜んでいる。それぞれの家族関係を修復することはなかなか難しい。しかし子どもの問題が表出することによって、それまで隠れていた家族の問題が浮かび上がり、適切な援助が得られることによって修復することも少なくない。このような時、子どもの問題行動や症状は、家族がそれぞれの気持ちを見つめ直し、本来持っていた心の交流を取り戻すきっかけとして出現しているのではないかと思われるほどである。

臨床場面で家族イメージ法を心理的援助の道具として用いる場合、面接でクライアントと家族の話をていねいに聞いてはじめて感じとれるような家族成員間の微妙な関係が家族イメージ法にどのように投影されるのかは大変興味深い。本論では、心理的向きを視線交錯度として数量的に取り扱うことを試みたが、今後、家族イメージ法を臨床場面でも適用することによって、クライアントとその家族が自分の家族関係の何かに気いて家族関係を修復できるような工夫をしていきたい。

謝 辞

本研究に被験者として参加し貴重なご意見を頂きました学生の方々、研究に関してご助言を頂きました札幌学院大学人文学部臨床心理学科の先生方に感謝いたします。

参考・引用文献

- 秋丸貴子・亀口憲治「家族イメージ法による家族関係認知に関する研究」家族心理学研究 2, 1, 61~73, 1988
伊藤隆二・橋口英俊・春日喬編「人間の発達と臨床心理学 4 思春期・青年期の臨床心理学」駿河台出版社 1994
Carter, E.A. and McGoldrick, M : The Family Life Cycle and Family Therapy, an Overview in E.A.Carte and M.

- McGoldrick (eds.) The Family Life Cycle, Gardner Press, New York, 1980
- 大下由美・亀口憲治「中学2年生の家族イメージの研究—父、母、子の3者関係イメージ—」家族心理学研究 13, 1, 1~13, 1999
- 岡堂哲雄「成人期のファミリー・プロセス」29~39 日本家族心理学会編集「ライフサイクルと家族の危機 家族心理学年報4」金子書房 1986
- 落合良行「第9章 親離れとはどうすることか—親子関係」139~151 落合良行・伊藤裕子・斎藤誠一「ベーシック現代心理学4 青年の心理学 [改訂版]」有斐閣 2002
- 亀口憲治「家族の問題 こころの危機と家族のかかわり」人文書院 1999
- 亀口憲治「家族のイメージ」河出書房新社 2003
- 亀口憲治「家族療法的カウンセリング」駿河台出版社 2003
- 亀口憲治「日本的技法としてのFITと粘土法」157~169 現代のエスプリ 亀口憲治編 家族療法の現在 451, 2005, 2
- 斎藤誠一「第3章 青年心理へのアプローチと課題」25~48 落合良行・伊藤裕子・斎藤誠一「ベーシック現代心理学4 青年の心理学 [改訂版]」有斐閣 2002
- 柴崎暁子・丹野義彦・亀口憲治「家族イメージ法のプロトコル分析と再検査信頼性の分析」家族心理学研究 15, 2, 141~148, 2001
- 新藤克乙・相模健人・田中雄三「小学生の「家族イメージ」に関する研究」家族心理学研究 16, 2, 67~80, 2002
- 鑑幹八郎「総論：ライフサイクルと家族」臨床心理学大系第3巻「ライフサイクル」金子書房, 1990
- 田中新正・白正喜「韓国人留学生と日本人大学生の両親への心理的距離の比較研究—「家族イメージ法」による」大分大学教育福祉科学部研究紀要 25, 2, 2003
- 中野まり・亀口憲治「思春期の子どもとその両親の家族イメージ—臨床群と非臨床群の比較を通して—」福岡教育大学紀要 41, 4, 283~290, 1992
- 茂木千明「家族の健康性に関する一研究—大学生の子どもの観点から—」家族心理学研究 10, 1, 47~62, 1996
- 茂木千明「家族図式による現実と理想の家族関係の比較—家族関係単純図式投影法を用いた体験学習から—」仙台白百合女子大学紀要 7, 29~43, 2002
- 前出朋美・鳥谷まき子「家族イメージ法の分析指標の検討—肯定的家族観・父子関係・母子関係・両親関係との関連」学苑昭和女子大学人間社会学部紀要 761, 40~47, 2004
- 村瀬嘉代子「子どもの父母・家族像と精神保健—一般児童の家族像の10年間の推移—並びにさまざまな臨床群の家族像との比較検討—」統合的心理療法の考え方 金剛出版, 2004 所収
- Rodgers, S. L., A Developmental Approach. to the Life Cycle of the Family, Social Work, 301~310.1977.

The influence of dwelling style on the relation of Students and thier family :
Their correlation with the Family Image Test and the scale of positive Family imagery.

TOKUDA Kimiko and SHIBATA Mifumi

The purpose of this study was to examine the influence of dwelling style on the family imagery and the family relationship of students : compairing 26 students who live with thier families and 28 students who live alone.

The Family Image Test and the scale of positive Family image were practiced. In The Family Image Test, the authors created a new method of eye-contact angles that examine the communication of the family members.

The results were as follows. The alone students were more positive, closer, good eye-contact than the students who live with families. For students the distance from their families make positive imagery of family and rebuild thier family relationship.

（とくだ きみこ 本学人文学部教授 臨床心理学専攻）

（しばた みふみ 社会福祉法人侑愛会）